The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近世大阪町人学の系譜と特質 : 懐徳堂学の再興
Author(s)	作道, 洋太郎
Citation	大阪大学史紀要. 1981, 1, p. 50-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5235
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

近世大阪町人学の系譜と特質

——懐徳堂学の再興——

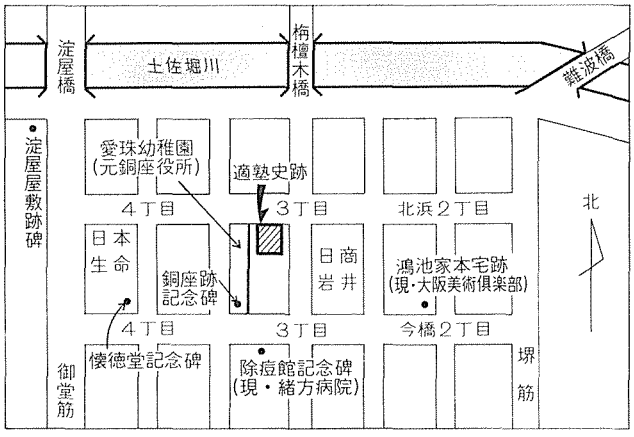
作道洋太郎

一　懐徳堂と適塾

大阪大学における学問の源流には、享保九年（一七二四）に創設された懐徳堂の学問と、天保九年（一八三八）に開設をみた適塾の学問とがあるとされてきた。この点に関して、木村英一氏は「懐徳堂と大阪大学」（大阪大学編『懐徳堂の過去と現在』所収、昭和五十四年発行）のなかで、「今村学長は、当時までに大阪大学の有に帰していた二大文化遺産、即ち史跡としての緒方洪庵の適塾の旧館と、旧懐徳堂の史料を含む懐徳堂文庫との、文教的意味について深く思いを致し、適塾を以って大阪大学の医学・理学的諸学部の源流とし、懐徳堂を以って文科系諸学部の源流として、二つを並べて適正規模において表彰して行きたい、という意見を機会あるごとに開陳された」と述べ、第五代総長今村荒男氏（昭和二十一年十二月～二十九年十二月）がその方針を明らかにしていたことを確認している。

昭和二十三年九月、大阪大学に法文学部が設置され、翌二十四年五月に法文学部が文学部と法経学部とに分離した際、懐徳堂蔵書三万六千冊が大阪大学へ寄贈され、懐徳堂文庫として収蔵されることになった。第二次大戦の戦火を免れた懐徳堂蔵書が本学に寄贈された事情については、大阪大学文学部編『懐徳堂文庫図書目録』（昭和五十一年）の序文に、当時文学部長であった梅溪昇氏が詳しく述べており、その経緯をうかがうことができる。

適塾が大阪大学医学部の源流をなすものであることは、余りにも周知のところであり、いまさら説明の必要もないくらいである。明治二年、適塾も懐徳堂もともに閉鎖されたけれども、適塾は同二年三月に設立された仮病院および医学校に発展的解消を遂げたのに対して、懐徳堂は明治二年の閉鎖から大正二年の財団法人懐徳堂記念会の設立にいたるまで四十五年間にわたる中絶の時代がつづいたのであった。さきに、大阪大学における学問の源流として、懐徳堂と適塾とを併記したが、明治以後における連続性という点からみると、両者にはかなり大きな違いが生じているといわざるをえない。



懐徳堂記念碑・適塾史跡周辺図

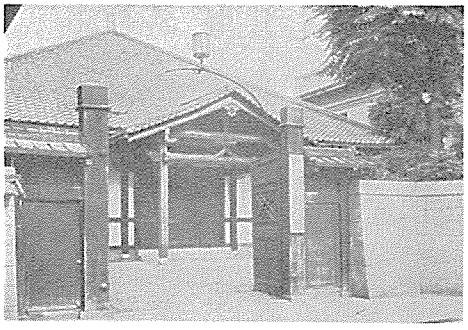
大阪大学編『緒方洪庵と適塾』（昭和五十二年）をみると、「明治初年頃に塾は閉ざされたらしく、光輝ある適塾の歴史はここに終りを告げたのであった。しかしその学統は断絶したのではなく、明治二年（一八六九）三月大阪府が大福寺（東区上本町四丁目）に仮病院および医学校を設立した際には洪庵の嗣子緒方惟準、義弟郁蔵、養子拙斎その他門人たちがこれに参加したのであって、適塾の発展的解消ともいうべきである。この医学校は後に幾多の変遷を経て現在の大阪大学医学部となったのである」と述べ、緒方家を中心とした人的系譜の面から考えても、また仮病院および医学校による医療事業ならびに医学教育の点からみても、本学医学部は適塾につらなるものであったことを明らかにしている。

その点、懐徳堂は明治二年十二月、最後の教授となった並河寒泉が、懐徳堂の門扉に、「百余り四十路（よそじ）四とせのふみ（文）の宿　けふ（今日）を限りと見かへり（返）ていづ」という和歌を貼付して退去して以来、大正初年まで研究教育機関としての懐徳堂の機能は停止してしまっていた。ところが、明治四十三年一月、大阪朝日新聞の主筆ですぐれた漢学者であった西村時彦（天囚）氏が、大阪人文会例会の席上において、懐徳堂創設期の助教として知られる五井蘭洲に関する講演をおこなった。これが大阪市民の反響を呼び、懐徳堂の顕彰とその学問の再興を目的として、大正二年に懐徳堂記念会が設立されたのである。したがって、懐徳堂の場合、適塾とは違って大きな断絶がみられたことが特徴的であった。

懐徳堂再興の端緒となった大阪人文会は、大阪府立図書館初代館長の今井貫一氏の主唱によって設立されたもので、在阪好学の士の文化交流の場としての役割を果たしていた。記念会の発足に際しては、江戸時代以来、懐徳堂の運営について後援者のなかでも重要なメンバーであった鴻池善右衛門氏や、住友吉左衛門氏らが発起人となり、記念会会頭に住友吉左衛門氏が推されて就任した。同会の発足とともに、その趣旨に賛同して入会を希望する者が頗る多く、特別会員六二二名、普通会員一、三七〇名に達した。その後、懐徳堂重建の議が決せられ、大正五年には大阪市東区豊後町の府立大阪博物場西北隅に、懐徳堂の講堂の竣工をみた。この重建された懐徳堂では、定期学術講演会が開かれることになり、終戦の年の二十年三月十四日、大阪の大空襲により懐徳堂の建物の大部分が焼失するまでつづいた。その戦災のとき、書庫はさいわいに被災を免かれ、さきに述べたように、のちにその蔵書が大阪大学に寄贈されたのであった。

戦災をうけた懐徳堂では、同年七月十日に焼け残った書庫のなかで開講式を挙げ、同月十四日からはやくも定例講義を再開している。その熱意には驚嘆のほかはない。現在の春秋二季の懐徳堂講座が開かれるようになったのは、二十五年十一月からであった。

このように、懐徳堂にはその消長がみられたが、大阪町人学の殿堂であった懐徳堂の学問は、適塾とならんで大阪における実学の伝



戦災で焼失した重建懐徳堂の玄関

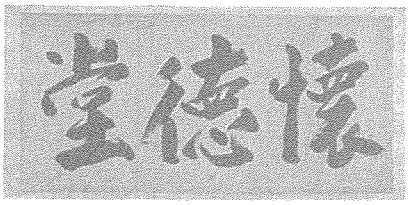
統をもっともよく示すものであり、その懐徳堂学における学風には、現代においても語り継がれるべきところがきわめて多い。つぎに、その懐徳堂の設立事情や学風をみていくことにしたい。

二　懐徳堂の設立と学風

享保九年、懐徳堂が設立されたとき、その中心メンバーとなったのは、「懐徳堂五同志」といわれる大阪町人たちであった。大阪尼崎町一丁目（現在、東区今橋四丁目）の醤油醸造業者（一説によると、漬物商ともいう）であった道明寺屋吉左衛門（富永芳春）、両替商（一説では舟板問屋）の備前屋吉兵衛（吉田可久）、貸家業の三星屋武右衛門（中村良斎）、家業は不詳の舟橋屋四郎右衛門（長崎克之）、鴻池家三代の当主宗利の女婿にあたる鴻池屋又四郎（山中宗古）がそれである。

この五同志により懐徳堂が設けられることになり、その講舎には道明寺屋の隠居宅（現在、大阪今橋の日本生命の本社所在地）があてられた。初代学主には、浅見絅斎の高弟として知られた三宅石庵を招き、その門下の中井甃庵が学問所預り人となった。石庵の学問は陽明学を主としながらも封建教学の朱子学や、京都の伊藤仁斎にはじまる古学などもとりいれ、諸説をあわせて折衷したものであったので、「懐徳堂の鵺学問」とも評されたことは有名である。

懐徳堂では、四書（大学・中庸・論語・孟子）・五経（易経・詩経・書経・春秋・礼記）を教えたが、その解釈は折衷的で、そのためさきに述べたように「鵺学問」ともいわれた。首は朱子で、尾は陸（陸象山）、脚は王（王陽明）のようで、鳴く声は医に似ているといわれた。その医というのは、石庵が丸薬の「反魂丹」を市販し、病弱の子春楼の療養費に充てていたからである。石庵はまた『中庸』の解釈においてすぐれ、ひろく学んで、これを自由に批判し、かつ中正を得ることが自由討究の学問精神であることを明らかにした。こうしたところに懐徳堂の特質がうかがわれ、学問としての整合性よりも、その実践性を重視し、町人向けの教養的儒学を創造したところに大きな意義が認められる。その点、江戸幕府の学問所であった江戸湯島（はじめ上野忍ケ岡）の昌平黌とは性格をいちじるしく異にしており、懐徳堂の学問は虚心坦懐で、町人教育の本旨にそうものであった。



三宅石庵先生書

懐徳堂の開設に先立って、甃庵は正徳三年（一七一三）、同志を糾合して大阪安土町二丁目に多松堂という講舎をつくり、恩師の石庵を迎え、のちに高麗橋三丁目に移転したが、享保九年（一七二四）三月の大火で焼失し、一時大阪郊外の平野郷町に難をさけた。同町には享保二年に惣年寄の土橋友直ら富裕な町人地主層により設立された含翠堂（はじめ老松堂と称した）があり、石庵は含翠堂で講義をおこない、大阪の門人たちは平野郷町に石庵を訪ねた。このとき、前記の五同志たちが首唱者となって、尼崎町一丁目に懐徳堂を設立し、同九年十一月に石庵をここに迎えたのである。

当時、最初の幕政改革である享保改革を実施した将軍徳川吉宗は、

学問奨励の教化政策を強力に推し進めていた。石庵の友人三輪執斎はこの情報を得て、それは甃庵から五同志に伝えられた。五同志による運動がはじまり、江戸において奔走の結果、享保十一年七月には幕府による公許の学問所となり、学校地として諸役は免除された。『懐徳堂内事記』のなかで、懐徳堂のことを「吾党の学問所」といっているが、そうしたところにも五同志を中心とした大阪町人の意気込みをうかがうことができる。

懐徳堂の学則にあたる「懐徳堂定約」によれば、正課の課目としては四書五経以外の雑書などは講義しない定めとなっていたが、石庵は儒学のみならず和学の研究においてもすぐれ、石庵の門人五井蘭洲は日本の古典に関する多くの著書をあらわし、そのなかには『伊勢物語』や、『古今和歌集』の注釈書である『勢語通』『古今通』はじめ、『源氏物語』の概要を記した『源語提要』、『万葉集』の注釈書の『万葉詁』、『日本書記』の内容を要約した『日本提要』などがある（小島吉雄「懐徳堂と和学」、大阪大学編『大阪の学問――懐徳堂・適塾――』所収、昭和五十五年）。口の悪い上田秋成が、『胆大小心録』のなかで、「五井先生というがよい儒者であった」といっているくらいであるから、蘭洲は余程の傑物であったのであろう。

したがって、懐徳堂においては課外の課目として和学も講義し、医学にも説き及んでいた模様である。懐徳堂の儒学者が和学や医学にも通じていたことは、主義や主張にとらわれない自由討究の精神を旨とした懐徳堂の学風を知るうえで興味深い。

懐徳堂の学風は、その「学問所壁書」にもよくあらわれている。その第一条に、「学問は忠孝を尽くし、職業に励むことを目的とするものであり、講釈もその趣旨を説くことが第一であるから、書物を持参しなくても聴講して差支えない。したがって、やむをえない用事ができた時には、講義中であっても退席してよろしい」と記している。また同壁書に、はじめは「武家方は上座とするが、講釈が始まってから出席した場合には、その差別はない」と規定していたが、四代学主の中井竹山（甃庵の長男）のとき、これを「書生の交わりは貴賤貧富を論ぜず、同輩とすべきこと」となし、士農工商の身分制の枠を越えた理解を示したことは注目されよう。

三　大阪町人の学問と商家経営

懐徳堂が創設された享保期は、さきに述べたように、享保改革が断行された幕政の大きな転換期であった。この頃になると、豪華絢爛たる元禄文化を創り出した経済の発展期から、事態は一変して不況の局面を迎え、政治や社会経済の再編成をはからざるをえぬ状態に追い込まれていた。そのため景気の動きも、元禄期（一六八八～一七〇四）のインフレ基調から、正徳・享保期（一七一一～一七三六）にはデフレ基調に転じた。

その影響を受けて、商家経営にも変化があらわれ、経営体制を引き締め、家業の永続をはかるために〝攻めの経営〟から〝守りの経営〟へと戦略転換をおこなうことを余儀なくされた。多くの商家では「家訓」や「家憲」などを制定し、大阪町人の生活信条とした始末・才覚

・算用の精神や、勤倹力行・創意工夫・独立自営・商道一徹などの伝統精神が明文化された。

享保期における家訓制定の引き金となったのは、宝永二年（一七〇五）における「淀屋の闕所」（幕府の命により淀屋の全財産が没収となり、所払いとなった事件）であった。大阪の代表的な初期豪商として知られた淀屋家は、初代与三郎（常安）、二代三郎右衛門（箇斎）・四代三郎右衛門（重当）・五代三郎右衛門（広当・辰五郎）とつづいたが、辰五郎の代になって闕所を命じられた。淀屋の豪奢をきわめた生活が町人の身分に過ぎたものとされ、幕府の忌諱に触れたためである。

『堂島旧記』（米商旧記）をみると、淀屋は「町人にしては前代未聞の豪富」であったと述べ、また「難波長者」とさえ呼ばれていたと説いている。このような初期豪商の倒産から、当時の新興町人であった鴻池・三井・住友などが学んだ歴史の教訓は、淀屋のような多角経営を排して一業専心の徹底をはかり、〝守りの経営〟への転換をおこなうということであった。この時期に、家訓を定め、家産の維持や家業の永続をはかる体制を強化したのも、新しい時代に対応しようとした企業家精神のあらわれにほかならなかった。

住友家では、享保六年（一七二一）に住友家五代の友昌が、別子銅山家法書ならびに長崎店家法書を定め、京都に本店を置く三都の豪福三井家においても、翌七年に二代高平（法名宗竺）が「宗竺遺書」という家法書をつくり、さらに翌八年には鴻池家においても、三代宗利（家督はすでに四代宗貞に譲っていた）が「家定記録覚」を制定しているのも、決して偶然の一致であったとはいえないであろう。

このような家訓による経営の体制が確立した享保期において、大阪町人の学問所である懐徳堂が開設されたことは、商家経営と学問との深いつながりがみられたことを示している。鴻池家における家訓を集大成した三代宗利の女婿にあたる鴻池屋又四郎が、さきに述べたように、「懐徳堂五同志」のメンバーであったことも、また鴻池家の家訓「家定記録覚」が制定された年の翌年にあたる享保九年に懐徳堂が設立されたことも、やはり無関係ではありえなかった。大阪町人が学問所を設けて、近世の儒学その他の学問を現実の社会生活に活用する道を求め、聖人の教えを通じて商人としての自覚を高め、社会秩序における商人階層の役割やその責任を認識したことは、家訓にあらわれた経営理念の確認とその実践とも結びついていたのであろう。それは懐徳堂が大阪の上層町人によって支えられ、また家訓を制定した商家が江戸期豪商といわれた商人階層の一部の者であったことなどとも関連しているものと考えられる。

住友家の五代友昌の異母弟にあたる友俊（泉屋理兵衛を名乗り、育斎と号したが、先祖の入江土佐守の後を継いで入江友俊とも称した）も懐徳堂に学び、五井蘭洲から教えを受けた。友俊は病弱であった兄の友昌に代わって家政改革をおこない、寛延期（一七四八～五一）には、「捻手代勤方心得」「別家手代取締方」「銅吹所取締」などの多くの家訓を制定した。前記の享保期における住友家の家訓が別子銅山や長崎店を対象としていたのにくらべると、これらは住友家の大阪本店ならびに大阪の銅吹所を対象としていた点が違っていた。友俊は「其形長高く健強にして

音声高く凛々たる風骨」（岡山撫山『浪華人物誌』）であったといわれ、沈滞した経営の刷新をおこない、家政改革を断行するのに必要な素質や実行力に恵まれていた。友俊のこうした実践的性格も、懐徳堂の学問の影響が少なくなかったであろう。懐徳堂が大阪町人学の殿堂といわれるのも、そのためである。近世町人道というものも、幕藩制社会における経営危機を克服する過程において、経営理念の提唱とその実践などを経て確立した歴史的所産なのであった。

この享保期には、町人道の確立を提唱した石田梅岩が、京都車屋町御池上ルの自宅を開放して、心学の講席をひらき、「石門心学」を説き、町人に倫理的自覚を促し、武士と対等の立場にたつよう力説し、町人階層に自信と自覚とを強めさせたこともよく知られている。梅岩は『都鄙問答』（元文四年〔一七三九〕刊）のなかで、「売利を得るは商人の道なり」と述べ、商業利潤の正当性を強調し、「商人の売利は士の禄に同じ」とも説いた。さらに「商人の道と言うとも何ぞ士農工の道に替ること有らんや」と言い、また「士農工商とも天の一物なり。天に二つの道有らんや」と論断し、梅岩はそこに「一つの道」すなわち道義の根本を浮き彫りにしたのであった。このようにして、梅岩は町人たちに発想の転換を求め、町人の社会的役割について積極的な意義を強調し、新しい価値体系の教化につとめた。そこには、近松門左衛門が『夕霧阿波鳴渡』（正徳二年〔一七一二〕初演）のなかで、「侍とても貴からず、町人とても賤しからず、貴いものは此の胸一つ」と言い放った心意気と相通じるものさえ感じられる。

梅岩の門人、手島堵庵は梅岩の没後、各地において心学講舎を開設して、心学の普及につとめたが、大阪への心学の導入は、天明五年（一七八五）九月、島の内錺屋町心斎橋の三木屋太兵衛（井上宗甫）によっておこなわれ、心学明誠舎に発展した。つづいて敦厚舎（玉造）、静安舎（雑喉場）、倚衡舎（富島町）、恭寛舎（天満天神筋）、協恭舎（北堀江）、信成舎（平野町）が開かれ、いわゆる「大阪の七舎」が設けられた。

こうした心学の大阪進出に対して、懐徳堂の第四代学主であった中井竹山は、その著『草茅危言』（寛政元年〔一七八九〕著述）のなかで、心学が日常生活に関する教化をおこない、世に裨益するものであることを認めながらも、他方において、心学道話で卑近な言辞を用いて愚俗を引き入れていることは大いに害があり、幕府はその取締りをおこなうべきものとさえ述べている（柴田実『梅岩とその門流――石門心学史研究――』昭和五十二年）。

このように、心学には強力な批判的意見もみられたが、京都や大阪ばかりではなく、全国各地に普及し、町人階層のみならず、後には幕府当局や諸大名にまで及び、また都市においても農村においても流布したのであった。その点、大阪の上層町人を対象としていた懐徳堂の学問とはその性格が違っていた。

四　懐徳堂学派の人びと

懐徳堂の学主は、初代三宅石庵、二代中井甃庵の後、石庵の子春楼が三代学主となり、春楼の没後、中井竹山が四代学主となり、弟の履軒は陰から竹山を助けた。竹山の後は、竹山の子碩果、並河寒泉（竹

中井竹山画像

山の外孫)、桐園(履軒の孫)となったが、幕末期の慶応三年(一八六七)になると、懐徳堂の経営が窮状におちいり、寒泉・桐園が連名で大阪町奉行所に援助を懇請せざるをえぬ状態となった。

その後、明治二年にはさきに述べたように、懐徳堂は閉鎖のやむなきに立ち至った。その間、懐徳堂の名声は、中井竹山・履軒の兄弟の努力によるところが大きく、その時期には懐徳堂の黄金時代を迎えた。

懐徳堂に学んだ人びとのなかから、『出定後語』『翁の文』などを著わした富永仲基、『夢之代』『宰我の償』などの著作で知られる山片蟠桃、『三貨図彙』『草間伊助筆記』『鴻池新田開発事略』『麓の栞』『茶器名物図彙』などの多くのすぐれた書物を著わした鴻池屋伊助(草間直方)などの著名な町人学者が輩出した。

富永仲基は、「懐徳堂五同志」のメンバーである富永芳春の三男で、仲基は「吾は儒の子に非ず、道の子に非ず、亦仏の子に非ず、傍ら其の云為を観て、且つ私にこれを論ずること然り」と言い、儒教・神道・仏教を批判するとともに、この三つの道のほかに「誠の道」のあることを明らかにした。仲基は自由討究の批判的な立場をとり、幕府の教学の権威も相対化しようとした。そのため恩師の三宅石庵から破門されたくらいであったが、懐徳堂の生んだ天才であったことはいうまでもない。

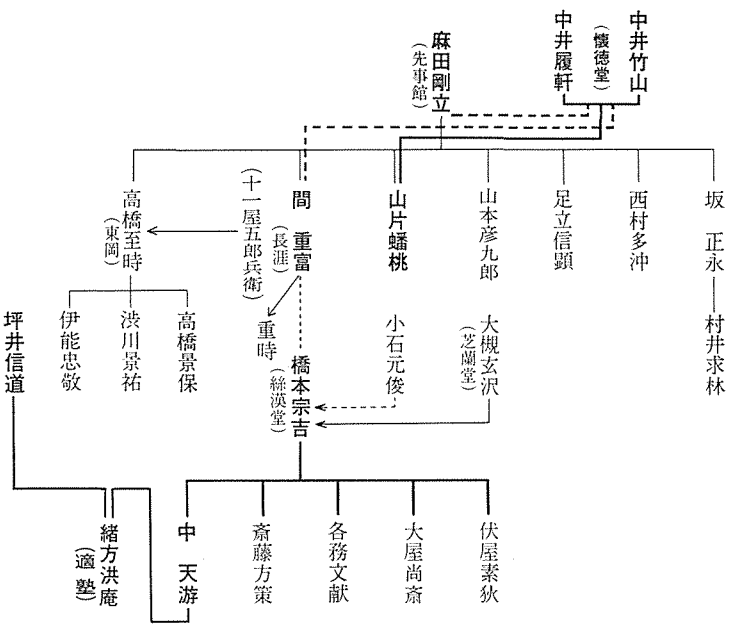
山片蟠桃は、北浜の両替商升屋(山片家)平右衛門に奉公し、主家の発展に尽力し、別家となり升屋小右衛門と称した。蟠桃が仙台藩の藩財政再建に成功したことは有名で、江戸後期の経世家として知られる海保青陵は、その著『升小談』でこのことを取りあげている。懐徳堂では竹山・履軒に師事し、中井門下の諸葛孔明ともいわれたくらいの傑物であった。天文暦学者・医者として知られた麻田剛立とも交流し、儒教的・科学的合理主義を唱え、『夢之代』では、天文・地理・歴史・制度・経済・無鬼などについて述べ、地動説を主張し、霊魂不滅論を否定して無鬼論(鬼神論)のような唯物論的傾向を示した。また該博な世界地理の知識を持ち、欧州諸国の動向をさぐり、アジアにおける植民地化の危機を訴えていることは注目されよう。医学については、伏屋素狄の生理実験内容を正確に理解するとともに、帝王切開の合理性を説いているのも興味深い(末中哲夫「懐徳堂学派の人々――大坂実学の主張――」、相良亨ほか編『江戸の思想家たち』(下巻)所収、昭和五十四年)。

このように、蟠桃は麻田剛立の門人であったが、同じ剛立門下の間重富(長涯)の後援を得た橋本宗吉の下から伏屋素狄・大矢尚斎・各務文献・斎藤方策・中天游らが輩出した。緒方洪庵は中天游の門人であったから、その系譜をたどれば麻田剛立の学統につらなる人びとのなかに加えられるであろう。剛立は懐徳堂と関係が深く、

中井履軒画像

中井履軒の『越俎弄筆』（安永二年〔一七七三〕）は、剛立による人体解剖を実見したことによって著わされたものであるといわれる。したがって、適塾の学問は懐徳堂の学問のひろい流れのなかに位置づけることができるであろう。この点に関して、宮本又次氏は麻田剛立から橋本宗吉に至る人的系譜や、麻田流天文学を創り出した人びとを図示している（同氏『大阪文化史論』一三三頁）。その原図に、麻田剛立と懐徳堂との関係、橋本宗吉と適塾との関連などを付け加えて、次に図示しておく。

近世大阪における学問の系譜



〔出典〕宮本又次『大阪文化史論』133頁参照。なお同書には記載されていないところは太い線（ — ）をもって示し、また点線（ … ）は相互に交流のあったことをあらわしている。

このような、麻田剛立・間重富・橋本宗吉を軸とした懐徳堂と適塾とのつながりについて、宮本又次氏は次のように述べている。すなわち、「麻田流天文学の優秀なる発展はまさに大阪という町人社会の土壌で生まれた学問的所産であり、また懐徳堂が一流一派の学を固執せず、解放的で、和学も洋学も抱擁し、とくに中井履軒の儒学はある程度蘭学をも摂取しており、山片蟠桃の如きにおいて、独自の開花を見たわけであるが、この履軒と親交ある剛立あるいは長涯の出現を考えねばならぬ。長涯と小石元俊の指導で、江戸の大槻玄沢に学んだ橋本宗吉がいて、その下から伏屋素狄・大矢尚斎・各務文献・斎藤方策・中天游がいて、中天游の指導で、更に江戸の坪井信道塾で学んだ緒方洪庵が大阪に帰って適塾を開き、大阪はまさに当時の洋学のメッカになる」（前掲書、一三二～一三三頁）と説かれている。

懐徳堂が育てた代表的な町人学者であった山片蟠桃の学問は、このような人的系譜のなかで位置づけられ、その大きな影響力もうかがうことができる。この山片蟠桃については、末中哲夫氏の雄篇『山片蟠桃の研究「夢之代」篇』（昭和四十六年）ならびに『山片蟠桃の研究「著作篇」』（昭和五十一年）があり、懐徳堂学の特質を理解することができる。今後においては、蟠桃の場合にみられるような個別研究が進化するとともに、全国各地における懐徳堂学の普及状態についても調査・研究を進め、その総合的研究をおこなうことが必要とされよう。

富永仲基・山片蟠桃とともに、懐徳堂の生んだ町人学者として知られる草間直方は、鴻池家に奉公して、のちに別家を許され、鴻池屋伊助と称し、熊本藩・府内藩・多度津藩・山崎藩・盛岡藩・田安家とも

取引をおこない、豪商鴻池善右衛門の片腕となり活躍した。さきにあげた直方の諸著作のうち、『三貨図彙』四十四冊はとくに著名で、江戸時代に著わされた貨幣史・金融史・物価史・貿易史などに関する最高の労作であった。このように、直方の学問には家業経営に活用することができる実用の学としての特徴がみられた（復刻版『三貨図彙』〔作道洋太郎解題〕参照、昭和五十三年）。直方はまた隠居後、学問研究のかたわら風流茶事で余生を楽しみ、『茶器名物図彙』九十五巻を著わした。同図彙は近世茶道史の名著といわれ、昭和五十一年には永島福太郎・原田伴彦氏の監修校閲により復刻公刊された。

五　懐徳堂の経営と大阪町人

大阪大学所蔵の懐徳堂文庫のなかに、天明元年（一七八一）十二月の「懐徳堂義金簿」と題した記録がある。これは懐徳堂修覆のための義金募集をおこなった時のもので、それに応じた町人たちは、白木屋彦太郎・小西新右衛門・鴻池宗太郎・播磨屋九郎兵衛・尼崎屋七右衛門・升屋平右衛門・米屋助右衛門・千種屋弥左衛門・尼崎屋市右衛門の九名であった。その義金総額は、銀一八貫九四匁であった。また「義金簿」には、この記録につづいて「貸付覚」という欄があり、懐徳堂が千種屋弥左衛門・升屋平右衛門・尼崎屋七右衛門の三名から総額銀一七貫目の貸付銀の融資を受けたことを記載している。このように、懐徳堂の経営には、同志の町人たちによる義金と貸付銀融資の援助が必要であった。

冨子家勘定帳

この同志のうちの米屋（冨子家）助右衛門の天保元年（一八三〇）正月「勘定帳」（大阪大学経済学部経済史・経営史研究室現蔵）をみると、その時期は前記の天明期よりは少しくだるが、米屋から懐徳堂に融資していた状況を、商人側の記録から明らかにすることができる。その「勘定帳」には、懐徳堂への融資が三回にわたって記帳され、次のように書かれている。「一　五百目　天保四巳年四月・元亥三月迄六ヶ年、元銀置居、亥四月より卯四月迄五ヶ年割済、年三朱之利かし　学校」「一　五百目　去巳年四月　かし請取懐徳堂義金学校」「五月四日　一　四百目　去巳年三月より元銀三ヶ年置居三朱之利、亥四月より卯四月迄五ヶ度割済之処、利足御断ニ而亥四月より無利ロ々元入残元かし　懐徳堂義金学校」と記載されている。銀四〇〇目ないし五〇〇目が年三朱（三%）という低利で融資され（他の商人貸しの場合は月七朱〔年利にして八・四%〕あるいは月八朱という事例が多い）、懐徳堂に対しては通常の利子率よりはるかに低くなっていた点が特徴的である。また懐徳堂のことを、たんに「学校」とか、「懐徳堂義金学校」とも書いていることは興味深い。なお、米屋は千種屋（千草屋・平瀬家）の一族であった。

また宮本又次氏は、安政六年（一八五九）懐徳堂において同志から五〇年間無利息で借銀を受け、それを銀主に預け、五年間五朱の利息を得た事例を紹介している。その銀主は平瀬宗十郎（銀四五貫目）・平瀬

市郎兵衛（銀一五貫目）・白山彦五郎（銀二〇貫目）の三名（合計銀八〇貫目）で、懐徳堂では元金なしに五朱の利息を受けて経営資金としたのであった（宮本又次『大阪経済文化史談義』一五七頁）。

このようにして、懐徳堂創設期の「懐徳堂五同志」はじめ、これらの町人たちが懐徳堂の経営に参加し、大阪独自の学問所が維持され、町人教化の目的を達成することができたのであった。

六　懐徳堂学の復興

近世大阪町人学の殿堂として重要な機能を果たした懐徳堂について、これまで多くの研究がみられ、「天下の台所」としての繁栄をみせた大阪特有の経営風土との深いかかわり合いにおいて、懐徳堂における学問の特質が説かれてきた。

ところが、この懐徳堂の学問や、その流れを汲む懐徳堂学派の人びとについての個別研究は、中井竹山・同履軒はじめ、富永仲基・山片蟠桃・草間直方などの代表的な人物は別として、未だそれ程深化していないのが現状である。

今後においては、こうした研究史にみられる欠点を克服するとともに、個別研究の深化にあわせてその総合的研究を進め、近世大阪における学問の独自な性格を再検討し、大阪町人の行動原理ないし価値体系の形成過程を明らかにして行くことが必要であろう。

冨子家勘定帳

このような研究を通じて、懐徳堂の学問にみられる自由討究の精神の現代に通じる意義を明らかにするとともに、それが近世町人階層の生活原理にどのような影響を及ぼしていたのかを確認することが重要である。そうして、大阪町人学の伝統がいかにして近現代の関西企業家精神の歴史的基盤たりえたかを問題とし、現代にも生きている懐徳堂の学問の特質を多角的に究明しなければならない。それはまた「関西復権」の学問的指標を確立することにもなるであろう。その意味において、いまや懐徳堂学復興の秋（とき）が到来しているように思われる。

〔参考文献〕
大阪大学編『懐徳堂の過去と現在』（昭和五十四年）。同編『大阪の学問―懐徳堂・適塾―』（昭和五十五年）。宮本又次『大阪文化史論』（昭和五十四年）。同『大阪経済文化史談義』（昭和五十五年）。末中哲夫「懐徳堂学派の人々―大坂実学の主張―」（相良亨ほか編『江戸の思想家たち』（下巻）・昭和五十四年）。小堀一正・山中浩之・加地伸行・井上明大『中井竹山・中井履軒』（昭和五十五年）。作道洋太郎「懐徳堂と適塾―商都大阪の実学の伝統―」（『週刊東洋経済』第四二五八号・昭和五十五年）。

（さくどう　ようたろう　大阪大学経済学部）